Osaka Shoin Women's University Repository

古今著聞集における「なまめかし」について

北村英子

謙倉時代の文学作品になると、平安文学に隆盛を極めた美的語詞、「なまめく」「なまめかし」は激減する。戦記文学においてはすっかりその影を潜めてしまい、説話文学においてはその出現は希少である。

今ここで、説話文学の三つの作品について、「なまめかし」を検討してみることにする。『宇治拾遺物語』から『十訓抄』『古今著聞集』と歴史的順序に従って点検すると、『宇治拾遺物語』においては「なまめく」「なまめかし」は皆無であり、『十訓抄』には後述するが「なまめく」が一例あり、『古今著聞集』には「なまめく」二例と「なまやか」という新しい語形が二例出現する。今回ここでは『古今著聞集』に焦点を搾って検討することにしたい。

『古今著聞集』における「なまめく」「なまやか」の用例は次の四例である。

(1) 一七三　或女石清水に参籠詠歌して神徳を蒙る事

中比なまめきたる女房ありけり。世中たえ〴〵しかりけるが、みめかたちあひぎゃうづきたりけるむすめをなんもたりける。十七八ばかりなりければ、これを、いかにもしてめやすきさまならせむと思ける。

（巻第五「和歌第六」）

(2) 四三二　朱雀門の上に女賊病臥の事

いづれの比のことにか、西京なるもの、夜ふかく朱雀門の前を過けるに、門のうへに火をともして侍けり。この門には、むかし鬼すみけるときくに、今も住侍にやと、おそろしさかぎりなくて過ぬ。そののち、又或夜とをるに、さきのごとく火をともしたり。この事あやしくて、在地に披露しければ、死生不知の村人ども評定して、「いざ行てみん」とて、そこばくきたりて、門に登てみければ、いとなまやかなる女房一人ふしたりけり。おもひよらぬ事なれば、ばけ物なめりと、おそろしなが

Osaka Shoin Women's University Repository

ら、ことの子細をとふに、はやく盗人なりけり。とし比この門にすみて、夜々は強盗をしてすぎけるが、この程手をおいて、やみふして侍けるなり。

（巻第十二「偸盗第十九」）

(3) 四三三　検非違使別當隆房家の女房強盗の事露顯して禁獄の事

隆房大納言、検非違使別當のとき、白川に強盗入にけり。其家にすくやかなるものありて、強盗とたゝかひけるが、なにとなくて強盗の中にまぎれまじはりにけり。うちあはんには、しおほせんことかたくおぼえければ、かくまじはりて、物わけん所に行て、強盗のかほをも見、又ちり〴〵にならん時、家をも見いれんとおもひて、かくはかまへけり。さて、ともなひて朱雀門邊にいたりぬ。おの〳〵物わけて、この男にもあたへてけり。強盗の中に、いとなまやかにて、こゑけはひよりはじめて、よに尋常なる男の、とし廿四五にもやあるらんとおぼゆるあり。どう腹巻に、左右こてさして、長刀をもちたりけり。ひをくゝりの直垂はかまに、くゝりたかくあげたり。諸の強盗の主領とおぼしくて、ことをきてければ、みなその下知にしたがひて、主従のごとくなん侍けり。……

（巻第十二「偸盗第十九」）

(4) 七一三　馬允某陸奥國赤沼の鴛鴦を射て出家の事

みちのくに田村の郷の住人、馬允なにがしとかやいふおのこ、鷹をつかひけるが、鳥をえずしてむなしくかへりけるに、あかぬまといふ所に、をしの一つがひゐたりけるを、くるりをもちて射たりければ、あやまたずおとりにあたりてけり。そのをしを、やがてそこにてとりかひて、えがらをばえぶくろにいれて、家にかへりぬ。そのつぎの夜の夢に、いとなまめきたる女のちいさやかなる、枕にきてさめ〴〵となきゐたり。あやしくて、「なに人のかくはなくぞ」と問ひければ、「きのふあかぬまにて、させるあやまりも侍らぬに、としごろのおとこをころしたまへるかなしみにたへずして、まいりてうれへ申也。この思によりて、わが身もながらへ侍まじきなり」とて、一首の歌をとなへて、なく〳〵さりにけり。

（巻第二十「魚蟲禽獣第三十」）

以上検討した如く、『古今著聞集』においては動詞「なまめく」が二例、『古今著聞集』において新しく「なまやか」という形容動詞が出現する。では一例ずつその美意識を探求することにする。

用例(1)　一七三　或女石清水に參籠詠歌して神徳を蒙る事

中比なまめきたる女房ありけり。世中たえ〴〵しかりけるが、みめかたちあひぎやうづきたりけるむすめをなんもたりける。十七八ばかりなりければ、これを、いかにもしてめやすきさまならせむと思ける。かなしさのあまりに、

Osaka Shoin Women's University Repository

一七三段の「或女石清水に参籠詠歌して神徳を蒙る事」と題する説話は『十訓抄』にも次のような同一説話がある。

『十訓抄』・第十可庶幾才能・藝業事

中比・なまめきたりける女房、世の中たえ〴〵しかりけるが、みめ・かたちあひきやうづきたるむすめをなんもちたりける。十七八ばかりなりければ、是をいかにもして、めやすきさまならしとおもひけるかなしさに、

（岩波文庫・永積安明校訂による。）

両書を比較してみると、〰〰線部分が改変されている部分であるが、話としての内容は同一である。時代的順序は『十訓抄』が一二五二年に成り、『古今著聞集』が一二五四年に成っており、時代的な間隔はあまりないが、『十訓抄』の方が二年先に編まれたものとされている。であるから、『十訓抄』の文章を『古今著聞集』に自己の編もうとする力強い文章に改変して採録したものと考えられる。また、『古今著聞集』より後に成立した説話文学にもこの一七三話が採録されているようであるがいずれ稿を改めて検討してみたい。

さて、「中比なまめきたる女房ありけり」と、説話特有の冒頭語「中比」という巻頭の副詞の次に、ここで問題にしている「なまめき」という美的語詞が使用されている。「なまめく」の意義については、初出の『伊勢物語』から現代の辞書が解く意義に至るまでいろいろな意義の変遷がみられるが、この箇所においては、「世の中たえ〴〵しかりけるが」とあるところから「上品な女房」「優美な女房」と解くよりも「若々しくて美しい女房」と訳す方がより妥当であるかも知れない。「中ごろの頃、若々しくて美しい女房がいた。この世に恵まれず貧しかったが、顔かたちに可愛さがあふれた娘を持っていた。十七、八歳ほどになったので、この娘をなんとかして見苦しくない様にさせてやろうと思っていた」と、若々しく美しい女性に対してその美を求めている。十七・八歳の娘を持つ母親であるが、若々しい感じの美しい女性であったと推測出来る。「なまめき」という語形は動詞の連用形であるが、この「なまめく」という美的語詞が明確に初めて認められる初出の作品は、平安初期の『伊勢物語』である。次に『伊勢物語』の「なまめく」の用例を示すと、

① 昔、男ありけり。うひかぶりして、ならの京、かすがのさとに、しるよしして、かりにいきけり。そのさとに、いともなまめきたるをむなばらすみけり。

② 昔、かやうのみことまうすみこをはしけり。そのみこ、をむなをいとかしこうめしつかひ給・けり。いとなまめきてありけるを、わかき人は、ゆるさざりけり。

（朝日新聞社刊、日本古典全書による）

と、「なまめく」の初出はいずれも動詞の連用形であり、みずみずしい若さを述べている。『伊勢物語』の用例①と、『古今著聞集』の用例(1)を比較した時、「……けり（る）」と力強い文体、また、「なまめき」という動詞の連用形の表出方法、〝若々しくて美しい〟という語気が感じられる所など、『伊勢物語』の「なまめく」げなり。

Osaka Shoin Women's University Repository

ろいろな意義の変遷がみられるが、この箇所においては、一廿の中
たえ〴〵しかりけるが」とあるところから「上品な女房」「優美な

用例(2)　四三二　朱雀門の上に女賊病臥の事

……（前略）……又或夜とをるに、さきのごとく火をともしたり。この事あやしくて、在地に披露しければ、死生不知の村人ども評定して、「いざ行てみん」とて、そこばくきたりて、門に登てみれば、いとなまやかなる女房一人ふしたりけり。おもひよらぬ事なれば、ばけ物なめりと、おそろしながら、ことの子細をとふに、はやく盗人なりけり。とし比この門にすみて、夜々は強盗をしてすぎけるが、この程手をおいて、やみふして侍けるなり。

「なまめかし」という語詞の歴史上、この『古今著聞集』において、ここに初めて「なまやかなる」という新しい語形で出現する。もちろん、これは形容動詞の連体形である。これに類した意の語は「なまめかしげ」という形容動詞の語形で古く『落窪物語』に次のような用例がある。

○　君はまづねびまさりて、いとめでたうて居給へれば、いみじく幸おはしけると覚ゆ。そよそよとさうぞき、汗衫重ね著たる人、いと若う清げなる十余人ばかり物語して、いとなまめかしげなり。

（朝日新聞社刊、日本古典全書による）

このように「なまめかしげなり」という形容動詞の終止形で古く表出されているが、この『古今著聞集』の如く同じ形容動詞であっても「なまやかなる」という語形で出現したのは、ここが初出である。意義においては「なまめかしげ」も「なまやか」も対象との距離を置いて、「……の感じであるさま」「いかにも……の感じがするさま」「いかにも……らしいさま」「感じとして……であるさま」「見た印象として……らしいさま」の場合に使用する。「なまやか」は「なま」に「やか」という接尾語が付して創造された語詞と考えられるが、『時代別国語大辞典上代編』に次のように解かれている。

○　〔考〕ラカ・ヤカは、ともに、もと〜ラ・〜ヤの形をもつ派生名詞に、さらにカが接尾した結果生じた形であるが、接尾語ヤの造語能力は、接尾語ラに比して、よりはやく衰え、奈良時代においてすでに微かな存在となりつつあったために、ヤカが一語の接尾語として意識されることは、ラカよりもはやかったと思われる。

（「らか」の項の「考」による）

「らか」「やか」については問題があるようであるが、ここでは「やか」に焦点を搾って少し『古今著聞集』中における「……やか」を覗いてみることにする。

○　もとの文字の上をとめて、あざやかになさんはなにの難かあ

い〟という語気が感じられる所など、『伊勢物語』の「なまめく」の用法を意識的に採り入れたものであろうか。いずれにせよ「なまめく」という平安美の風雅の精神を、そのまま受け入れようとする態度が見られ、王朝美をなつかしんでいる意識がうかがわれる。

次に『古今著聞集』の用例(2)を検討する。

用例(2)　四三二　朱雀門の上に女賊病臥の事

……（前略）……又或夜とをるに、さきのごとく火をともしたり。この事あやしくて、在地に披露しければ、死生不知の村人ども評定して、「いざ行てみん」とて、そこばくきたりて、門に登てみれば、いとなまやかなる女房一人ふしたりけり。おもひよらぬ事なれば、ばけ物なめりと、おそろしながら、ことの子細をとふに、はやく盗人なりけり。とし比この門にすみて、夜々は強盗をしてすぎけるが、この程手をおいて、やみふして侍けるなり。

「なまめかし」という語詞の歴史上、この『古今著聞集』において、ここに初めて「なまやかなる」という新しい語形で出現する。もちろん、これは形容動詞の連体形である。これに類した意の語は「なまめかしげ」という形容動詞の語形で古く『落窪物語』に次のような用例がある。

○　君はまづねびまさりて、いとめでたうて居給へれば、いみじく幸おはしけると覚ゆ。そよそよとさうぞき、汗衫重ね著たる人、いと若う清げなる十余人ばかり物語して、いとなまめかし

（朝日新聞社刊、日本古典全書による）

このように「なまめかしげなり」という形容動詞の終止形で古く表出されているが、この『古今著聞集』の如く同じ形容動詞であっても「なまやかなる」という語形で出現したのは、ここが初出である。意義においては「なまめかしげ」も「なまやか」も対象との距離を置いて、「……の感じであるさま」「いかにも……の感じがするさま」「いかにも……らしいさま」「感じとして……であるさま」「見た印象として……らしいさま」の場合に使用する。「なまやか」は「なま」に「やか」という接尾語が付して創造された語詞と考えられるが、『時代別国語大辞典上代編』に次のように解かれている。

○　〔考〕ラカ・ヤカは、ともに、もと〜ラ・〜ヤの形をもつ派生名詞に、さらにカが接尾した結果生じた形であるが、接尾語ヤの造語能力は、接尾語ラに比して、よりはやく衰え、奈良時代においてすでに微かな存在となりつつあったために、ヤカが一語の接尾語として意識されることは、ラカよりもはやかったと思われる。

（「らか」の項の「考」による）

「らか」「やか」については問題があるようであるが、ここでは「やか」に焦点を搾って少し『古今著聞集』中における「……やか」を覗いてみることにする。

○　もとの文字の上をとめて、あざやかになさんはなにの難かあ

用例(2)　四三二　朱雀門の上に女賊病臥の事

「なまめき」という動詞の連用形の表出方法、〝若々しくて美し

Osaka Shoin Women's University Repository

らん。

。今一度あざやかなる味をすゝめて、心やすくうけ給をきて、

。はり衣のあざやかなるに、長絹の五帖の架裟のひだあたらしき……、

。其花あざやかなれど、かたぶきふしたりければ、仰によりて負になりにけり。

。きらびやかに申てけり。仍供物以下の事、注進にまかせて給てけり。

。件相撲を、しのびやかにめしよせて、「此中納言が相撲このむがにくきに、

。祇園中路といふかたより、忍やかにぐしてやりてけり。

。其家すくやかなるものありて、強盗とたゝかひけるが、なにとなくて……、

。たけだちするたかに、いとすくやかげなる法師、ものゝぐはせで、

。暗誦のものあらば、すみやかに隆頼るくだるべし」といひたりけるに、

。すみやかに、これより歸給へ」といふを、時秋猶承引せず、

。我に心ざしをおぼさば、すみやかに歸落して道をまたうせらるべし」と、

。それにかなはずは、すみやかに流罪におこなはれ候へかし」と、

。「このたびたすかりがたくは、すみやかにわが命にめしかふべし」と申て、

。番長にはすみやかに他人をなさるべし」としるて申ければ、

。すみやかに定輔を配流せられ候へ」と、なく〳〵申されければ、

。我道、若父の藝におよばずは、すみやかに命をめすべし」とこそ申されけれ。

。すみやかにさして心み候べし」とて、やがてまかりいでゝ、

をしへつるがごとくにするに、

このように『古今著聞集』における「――やか」には「あざや

Osaka Shoin Women's University Repository

。たけだちするたかに、いとすくやかげなる法師、ものゝくはせで、

。すみやかにさして心み候べし」とて、やがてまかりいでゝ、

をしへつるがごとくにするに、

。すみやかにやくそくのまゝに給べし」とせめかけゝれば、

。すみやかにもとの所へをくりたてまつるべし」と大におどろきたるけしき……、

。すみやかに内侍などに、うかゞひ申され候へ」といふ。

。御使、向て御教書を付たりければ、すみやかにむかひて、いづれにてもはからひて、

。そのつぎの夜の夢に、いとなまめきたる女のちいさやかなる、枕にきて……、

。廿七八ばかりなる女の、ほそやかにて、長だち・かみのかゝり、すべてわろき所もなく、

。まことに佛の道にいらんのみぞ、まめやかにつきせぬ御祝なるべき。

。まめやかにおもしろげに思ひて、うちかたぶき〳〵きゝけり。

このように『古今著聞集』における「――やか」には「あざやか」「きらびやか」「しのびやか」「すみやか」「すくやか」「ちひさやか」「ほそやか」「まめやか」等の語詞が目につくところである。これらはいずれも状態性を示す語として表出されている。『古今著聞集』においてこれら幾語かの「――やか」の語が文中にちりばめられている中で、「なまやか」という語が造語された。そして、「なまめかしい」状態性を示す語詞として、平安美的語詞「なまめく」「なまめかし」を自己流に「なまやか」と造語しながらも、平安朝の崇高美へのあこがれの情を大切に残そうとする心がうかがわれる。

さて、用例(2)四三二話の「なまやか」の用法を検討すると、その美の対象はやはり女性であるが、今まで平安朝文学でみられたその多くは高貴な人物に求められていた美に対して、この謙倉時代を代表する説話文学『古今著聞集』においては、朱雀門の上に女強盗が病臥している状態を「なまやか」と讃えているのは興味をひく。強盗といえば普通恐ろしきものとされていて軽蔑の眼で見られるのに、ここでは「いとなまやかなる女房一人ふしたりけり」とある。まさか高貴な美を発揮するような場面ではない。強盗については『枕冊子』に次のような一文がある。

。名おそろしきもの　青淵。谷の洞。鱸板。鐵。土塊。雷は名のみにもあらず、いみじうおそろし。暴風。ふさうぐも。ほこ星。ひぢかさ雨。荒野ら。

強盗、またよろづにおそろし。らんそう、おほかたおそろし。

Osaka Shoin Women's University Repository

かなもち、またよろづにおそろし。生霊。くちなはいちご。鬼わらび。鬼ところ。荆。枳殼。いり炭。牛鬼。碇、名よりも見るはおそろし。

（百四十八段・朝日新聞社刊、日本古典全書による）

このように強盗はおそろしきものであったのに、朱雀門の上にまして病臥の女賊を夜に讃えているのは王朝時代の高貴な美を讃えたそれとは異質のものである。やはり、作者が男性らしい筆法を示している。

用例(3)　四三三　検非違使別當隆房家の女房強盗の事露顯して禁獄の事

隆房大納言、検非違使別當のとき、白川に強盗入にけり。其家にすくやかなるものありて、強盗とたゝかひけるが、なにとなくて強盗の中にまぎれまじはりにけり。うちあはんには、しおほせんことかたくおぼえければ、かくまじはりて、物わけん所に行て、強盗のかほをも見、又ちり〴〵にならん時、家をも見いれんとおもひて、かくはかまへけり。さて、ともなひて朱雀門辺にいたりぬ。おの〳〵物わけて、この男にもあたへけり。強盗の中に、いとなまやかにて、こゑけはひよりはじめて、よに尋常なる男の、とし廿四五にもやあるらんとおぼゆるあり。どう腹巻に、左右こてさして、長刀をもちたりけり。ひをくゝりの直垂はかまに、くゝりたかくあげたり。諸の強盗の主領とおぼしくて、ことをきてければ、みなその下知にしたがひて、主従のごとくなん侍けり。……

用例(2)四三二話に引続いて同じく盗賊談である。説話文学においては盗賊物語が必ずといってよい程収載されているが、同じ説話文学でも今まで検討してきた『今昔物語集』にも多くの盗賊談があるにもかかわらず、盗賊に対して「なまめく」「なまめかし」美は全然求められていなかった。であるのに、この『古今著聞集』において「偸盗第十九」所載中の二話に女盗賊に対して「なまやか」という語形でその美が求められているのは興味がある。

この用例(3)四三三話においては盗賊団の女頭領の話である。白川の邸に盗賊団が押し入る。〃すくやかなる〃男が強盗団とたゝかっているうちに、いつの間にか強盗どもの中にまぎれこんでしまう。戦っても勝ち目がないと思ったので盗品の分配も受け、強盗どもの顔を見おぼえ、どこまでも尾行して行き朱雀門のあたりに着いた。強盗の中に大変優雅で一見年二十四、五に見える美男の首領がいて、この犯人を検非違使の別当の邸内につきとめたところ、その犯人は意外に大納言と呼ばれた上臈の女房であったのである。白昼、都大路を、きぬかづきをぬがされて、獄に引かれる。諸人が見て驚かない人はなかった。なんと、実は二十七、八ばかりの女で、〃ほそやか〃で、背恰好、髪の様子、すべて欠点がなく、優美な女房であった。という機微に富んだ話である。この偸盗談の中に出てくる女盗賊、でも、最初は男装をしており年の頃二十四、五歳に見えた盗賊に対して「なまやか」とその美が求められている。この箇所でも男性であるが女性らしい姿態に対してその美が求められている事

Osaka Shoin Women's University Repository

もちたりけり。ひなくゝけの直垂にたまに。したがさ
げたり。諸の強盗の主領とおぼしくて、ことをきてければ、

盗賊に対して「なまめき」の美が求められている事も男性であるが女性らしい姿態に対してその美が求められている事

になる。実はこの盗賊男装をしていたのであるが、〝二十七、八歳の優美な女官であった〟とあるから、この「なまやか」な美は、もともと女性に対して、年の頃は二十四、五歳位の貴婦人を讃える語として、編者橘成季は捉えているようだ。平安朝文学の『とりかへばや物語』を思わせる筆法である。この四三三話の短篇の中に「すくやか」「ほそやか」そして「なまやか」と状態性を示す語が三語も使用されているのは注目すべきである。筆者の意識的な特筆であろう。そして、「なまやか」は筆者の王朝美を意識しての造語であろう。

用例(4)　七一三　馬允某陸奥國赤沼の鴛鴦を射て出家の事

みちのくに田村の郷の住人、馬允なにがしとかやいふおのこ、鷹をつかひけるが、鳥をえずしてむなしくかへりけるに、あかぬまといふ所に、をしの一つがひゐたりけるを、くるりをもちて射たりければ、あやまたずおとりにあたりてけり。そのをしを、やがてそこにてとりかひて、えがらをばえぶくろにいれて、家にかへりぬ。そのつぎの夜の夢に、いとなまめきたる女のちいさやかなる、枕にきてさめ〴〵となきゐたり。あやしくて、「なに人のかくはなくぞ」と問ひければ、「きのふあかぬまにて、させるあやまりも侍らぬに、としごろのおとこをころしたまへるかなしみにたへずして、まいりてうれへ申也。この思によりて、わが身もながらへ侍まじきなり」とて、一首の歌をとなへて、なく〳〵さりにけり。

七一三話では「なまめき」の下に「ちひさやか」と状態性の語詞を用いたためであろうか、「なまやか」とせず「なまめき」という動詞の連用形で表出されている。夢の中に現われたいかにも小さい感じのする女性の姿で出現する。おし鳥を射たれためす鳥が人間の女性の姿で夢の中に現われさめ〴〵と泣く、その小さい姿態を悲涙美、「なまめく」という美的語詞で讃えている。この悲涙美については平安期を代表する『源氏物語』にすでに描出されていた。

○「いかでか聞ゆべき。世に知らぬ御心のつらさも、あはれも、浅からぬ世の思出は、さまざまめづらかなるべき例かな」とて、うち泣き給ふ気色、いとなまめきたり。（帚木）

○大将の君は、世を思し続くる事いとさまざまにて、泣き給ふさま、あはれにこころ深きものから、いとさまよくなまめき給へり。（葵）

等数多い用例が見当たることは既発表（小著「なまめかし」）のところである。

以上『古今著聞集』における「なまめく」「なまやか」を検討した結果、「なまめく」二例については『伊勢物語』『源氏物語』等の影響が見られ、「なまやか」については、新しい語形の造語で、その対象となすものも、王朝期にあまり例がなかった「女賊」を扱っているのは興味をひくところである。しかし、用例(3)の四三三話

Osaka Shoin Women's University Repository

については、その用法、すなわち、男装をした女性を対象とした所等『とりかへばや物語』を思い出させる場面がある。「なまやか」は形容動詞であり、すでに王朝初期の作品『落窪物語』に「なまめかしげ」という形容動詞が使用されているにもかかわらず、「なまめかしげ」を使用せず、「なまやか」という新しい語形を造語したことは、筆者の言語感覚に秀でた表れと思われる。とにかく、状態性の語を数多く使用したその中で「なまめく」というこの語を状態性を示す語「なまやか」と改変したものと思われる。要するに、王朝時代に初めて、創造され隆盛を極め、王朝文学の数々の作品に「なまめく」「なまめかし」美がちりばめられて作品を飾った語詞。鎌倉時代に入ってとんと激減してしまうが、この『古今著聞集』においては、この「なまめく」「なまめかし」美の伝統を残そうと目論んでいた意識がうかがわれる。尚、平安時代に続出していた「なまめかし」という形容詞の語形では表出された箇所は見当たらなかった。

テキストは（日本古典大系『古今著聞集』を使用した。）

（本学非常勤講師）